

(2012 年度卒業論文)

19 世紀イギリスの新しい女性とスポーツ

法学部政治学科 4 年 M 組 30951296

磯村 玲奈

はじめに

19世紀初頭から中頃にかけて、イギリスの女性は厳しい家父長的性格の道徳律に支配されていた。特に中流階級の女性は「女性らしさ」を求められ、結婚して家庭に入り、「家庭の天使」として良い妻、良い母として家を守ることを基本とした。しかし19世紀後半になり、選挙権の拡大、教育法の改正など権利の拡大が推し進められる中で、女性たちも立ち上がり、女性の経済的自立と社会的権利の獲得を目指した。そのような中、従来から理想とされる「家庭の天使」という女性像に対抗するニュー・ウーマン、「新しい女性」と呼ばれる女性たちが出現した。彼女たちは文学作品のヒロインとして登場し、マスメディアに頻繁に登場した。そのような「新しい女性」と呼ばれる女性たちは、参政権や女子高等教育の拡大を訴える姿が描かれただけでなく、サイクリングをはじめとするスポーツ愛好者として描かれた。20世紀初頭にはゴルフ、ラケット、クロケット、フェンシング、水泳、ボート、サイクリング、新体操、など多岐に渡った種類のスポーツに彼女たちは参加した。そこで本論文では、元来男の占有物であったスポーツに「新しい女性」が参加した意味、そしてその結果どのような意識改革があったのかを探る。

まず第1章では、「新しい女性」とジャンル化される女性たちが誕生するに至った背景を探る為に、19世紀イギリスの女性像の変遷を辿っていく。ここでは、19世紀当初の理想の女性を表す「家庭の天使」を明らかにし、その上で「新しい女性」という名付けにある、彼女たちの「新しさ」とは何か探る。次に第2章では19世紀後半の女性がスポーツに参加していく経緯を考察する。まず、先行研究からヴィクトリア朝の女性とスポーツの位置づけを明らかとする。そして19世紀後半以前の女性とスポーツの関係性をみていく。女性がスポーツに参加する上での障害を踏まえた上で、19世紀後半になって女性がスポーツに参加するに至った契機を考察する。第3章においてはスポーツの中でも、サイクリングに着目する。「新しい女性」を題材とする際に、多くの本やメディアはサイクリングを取り上げ、「新しい女性」のシンボリック的存在である。本章では当時流行したサイクリングが女性にどのような影響を与え、どのような役割を果たしたのかを考察する。最後に第4章では、スポーツをする女性が世間からどのように見られていたのかを論じる。女性がスポーツに参加することによって、意識改革が起こったのか、それとも女性たちのスポーツ参加による意識改革には限界があったのかを探る。

なお本論文では、「中流階級」の女性を対象とする。その理由は、ヴィクトリア時代の理想の女性像は、中流階級が生み出した考えであり、それにより多くの中流階級の女性たちがスポーツを始め、様々な制限を受けていたからである。また、一部の例外を除いて1870年から1914年まで労働者階級の女性たちはスポーツをする為のお金、教育がなかったといわれているからでもある (McCrone,1998)。本論文では「中流階級」をいわゆるアッパーミドルクラス、ミドルミドルクラス、ロウアーミドルクラスの全てを含

めるものとする。つまり「中流階級」とは、新井潤美の規定するように、爵位を継げない貴族の次男など、実質的には上流階級の人々や産業資本家のような新興台頭勢力で構成されるアッパーミドルクラスから、医師・弁護士などの知的職業従事者、更に先祖は労働者階級でありながら、教育を受けて事務員などの事務職に就いた人々を含むロウアーマドルクラスまで包括すると考え、議論を進めていきたい（新井,2001）。

2013年1月31日 磯村 玲奈

目次

はじめに

1.	19 世紀イギリスの女性像の変遷	1
(1)	「家庭の天使」	1
(2)	「余った女」	2
(3)	「新しい女」	3
2.	女性のスポーツ参加の経緯	5
(1)	先行研究	5
(2)	19 世紀後半以前の女性とスポーツ	6
(3)	女性のスポーツ参加の障害	10
(4)	女性のスポーツ参加の契機	11
3.	女性とサイクリング	15
(1)	サイクリング流行の背景	15
(2)	自転車女性が女性に与えた影響	18
(3)	女性サイクリストと世間	21
4.	スポーツする女性と世間	24
	おわりに	26

1. 19世紀イギリスの女性像の変遷

(1) 「家庭の天使」

ヴィクトリア朝時代、主に産業革命の進展とともに台頭した中流階級の男性たちによって大英帝国は繁栄した。そして、その男性たちを支えたのは家庭を守る女性たちであった。彼女たちは国を支える重要な存在とされ、19世紀は家庭を賛美する風潮が強かった。評論家・美術評論家のジョン・ラスキンは、家庭を「あらゆる恐怖、疑い、不和を締め出す避難場所」として神聖視したように、家庭は俗悪とは無縁の領域だった(松村他,1996:61)。そして19世紀前半の小説にこのことが反映され、女性が本領を発揮すべき場は家庭とされ、家庭の幸せを描くものが多く残されている。ヴィクトリア時代の理想の女性像である「家庭の天使」でいることを女性たちは求められ、「家庭の天使」は、女性らしさのシンボルとして崇拜された。この言葉の由来は、コヴェントリー・パトモア(1823-96)の詩の題名、『家庭の天使』(The Angel in the House)である。4部からなるこの長編連作詩は女性の義務とその遂行を説き、女性、男性両方に行き渡った言説となった。川本静子は、「家庭の天使」を以下のように説明する。

＜家庭の天使＞とは、一口で言うなら、家庭という場で、両親に仕える従順な娘であり、夫を支える良き妻であり、子どもを慈しむやさしき母であり、かつ召使を統べる賢い女主人である女性のことなのだ。彼女はつねに正しく清くやさしく、自己犠牲と献身によって周囲の人びとを照らして導いていく、いわば灯台の光にも等しい存在である(川本,1999,10)。

『家庭の天使』を始めとする19世紀前半の出版物は、男は公領域、女は私領域という性別役割規範分業形成を世間に浸透させることに大きな役割を果たした。当時男性は肉体的、精神的、そして道徳的にも女性より優れていることが公認されていた為、女性は男性に依存し守られる代わりに、従順・謙虚であることを求められ、様々な不平等な状況にも耐えなければならなかった。法律の観点からみても、既婚女性は「夫の庇護下にある婦人」という呼び方をされ、実質的な地位が無かったことを示す。当時の手引書である『イギリスの妻たち』(The Women of England, 1839)にエリス夫人(Sarah Stickney Ellis)は「妻は何があっても夫を尊敬せねばならない」と唱えている(栗栖・出淵,2008:415)。

「家庭の天使」という言葉が生まれた背景には就労体制の変化による男女の分業促進があり、時代の流れであったといえる。産業革命以前、家庭が生産と消費の単位であり、家庭と労働の場が分離していなかった。その後、産業革命を機に家庭で行われていた生産活

動が工場へと移り、家庭と労働の場が分離することになった。それに伴い、多くのプロレタリアが誕生し、女性の社会的、経済的役割も従来とは違うものとなっていった。労働者階級の女性は家計を助ける為に働くことを余儀なくされた一方で、中流階級と上流階級の女性は働かないことを理想とされ、家にいて働かない女性となった。産業構造が変化して中流階級の男性の労働力が不可欠になると同時に、経済的単位としての家庭の機能が変わり、「家庭は城」という新たな意味を帯びるようになった。そして女性の役割として、家にいて妻として仕事に疲れた男性を癒す天使であることを求められたのである。

(2) 「余った女」

ヴィクトリア朝の女性たちは、結婚して、家庭に入ることが美とされ、また当然とされた。しかしながら女性たちの結婚に対する理想と、彼女たちが直面していた現実には大きな隔たりがあった。1840年代頃から、「余った女」というカテゴリーに入る女性たちが出現した。俗にいうこの「余った女性」たちはどのような背景で誕生したのであろうか。

彼女達の出現は、前節で触れた「家庭の天使」なしでは語れない。ジョージ・ムアの『モリソン』(1886)には、女性についての印象的なフレーズがある。「夫がいなければ女はなにもできない。駄馬には存在理由がある。結婚していない女にはそれがないのだ」(川本,1994)。当時の女性は、始めは父親に守られ、後に結婚することで父から夫に扶養されることが理想とされた。しかし、このバトンタッチが上手くいかなかった者、つまりは夫が見つからない女性達は、彼女たちは「余った女」などと揶揄され、自活の道を強いられたのである。

「余った女」と揶揄されていた女性達の実態はどのようなものであったのだろうか。George Gissing 著の *The Odd Women*¹ の中では、“Half a million” つまり 50 万人もの女性が過剰であることが指摘されている (Gissing,1994:37)。当時の総人口が 2088 万人ほどであったことを考慮すると、深刻な事態であったことがうかがえる。この統計でも明らかである通り、結婚適齢期でありながら、結婚できない女性が多く存在するという、極端な「女余り現象」が起こったのである。当時の記録から、渡会好一は次のように指摘している。

スコットランドも合わせた 1851 年当時の人口は、男よりも女が約 51 万人多かった。20 歳以上の女性が 100 人集まると、未婚が 30 人、未亡人が 13 人もいて『余った女』が社会問題になっていたから、愛していなくても、求婚されたらチャンスを見逃さず、結婚しなさい、そんな忠告がまかり通っていた (渡会,1997:5)

1 . ジョージ・ギッシングが 1893 年に出版した小説。当時の女性の社会の中での役割、結婚、モラル、初期のフェミニスト運動をテーマとする (ギッシング,1988)。

19世紀半ば以降の独身女性の数は、増加の一途を辿った。15歳以上の独身女性は、1851年には276万5000人であったのが、20年後の1871年には16.8%増加し、322万8700人になった。1851年の調査では、女性の総数は、男性より約51万人多かったが、独身女性と独身男性の数の差については、その後の20年間に72.7%も増加している(川本,1994:14)。

社会問題にもなった未婚女性の誕生の理由は主に3つ挙げられる。一つは男女の死亡率の相違である。ナポレオン戦争の影響で成人男子の数が減少した。二つ目が海外移住である。この時代のイギリスは、海軍力を背景とした強大な力を持ち、諸外国に影響力を強めていった。それに伴い、多くの男性がキリスト教の布教活動や商売の規模を広げる為に世界各地に出て行った。つまり帝国主義を進めていたイギリス本国から、結婚適齢期の男性が多く国外へ移動した。そして三つ目の理由が、上流及び中流階級男性の晩婚化の傾向である。経済力を蓄えてからの結婚を望み、晩婚化が進んだことなどが社会に大きな影響を与えた(水田他,1993:12)。

大量出現した未婚女性が、レディーとして恥ずかしくない唯一の活路としたのは、住み込みの家庭教師、ガヴァネス(Governess)であった。1851年の統計では、25,000人のガヴァネスがいたという記録がある(Vicinus,1973:5)。その頃、女子には良い教育機関がなかったこともあり、ガヴァネスが上級気取りの道具として多くの家庭で需要が高まった。ガヴァネスをヒロインにした『虚栄の市』、『ねじのひねり』、自身がガヴァネスだったC・ブロンテの『ジェーン・エア』などの文学作品もある。レディーとして恥ずかしくない唯一の活路であったのがガヴァネスであったが、ガヴァネスは職業的専門性よりも「有給雇用ではないこと(雇用契約は結ばない)」などが建前とされ、このような曖昧な位置づけで苦しんだのである(秋元,2006:53)。

(3)「新しい女」

1880-90年代のイギリス小説にはヒロイン像の大きな変化が見られた。従来の良妻賢母型のヴィクトリア朝における伝統的な女性像の「家庭の天使」のヒロインに代わって、「新しい女」と呼ばれる一群のヒロインたちが登場する。この「新しい女」は、当時「当世風の娘」「翔んでる女」「野性の女」「放縦な女」などという名前と呼ばれ、結局最後には「新しい女」と命名された(武田,2003:1)。「新しい女性」はメディアに大きく取り上げられただけでなく、1880年代から1920年代にかけて小説のヒロインとして登場した(武田,2003:1)。² 伝統的な理想とされていた女性とは違う女性像が登場した背景には、前節でふれた「余

² 一般的に「新しい女」小説とは、グラント・アレン(1848-1899)の『やっつてのけた女』(1895)、オリーブ・シュライナーの『アフリカ農場物語』(1833)、ジョージ・ギッシング(1857-1903)の『余計者の女たち』(1893)などが挙げられる(武田,2003:6)。

った女」と繋がりがあがる。川本静子は「良妻賢母にもとづく従来の女性の生のガイドラインは、しだいに有効性を失わざるをえない。結婚しないことが女性の生の選択肢に加わったことによって、結婚は、女のもっとも理想的な、かつ唯一の生き方ではなくなってきたからだ」と言及し、ここから「女性の役割や地位や本質の見直し」が促されたとする（川本,1999:29）。その上で「新しい女」の登場を促したのは、「余った女」たちの経済的困窮により、その救済策を模索する 19 世紀後半のフェミニズム運動の盛り上がりだと指摘する。武田美保子は「〈新しい女〉の出現をめぐって書かれた当時の雑誌記事や、〈新しい女〉をヒロインとする小説は枚挙にいとまないにもかかわらず、そこでイメージされている〈新しい女〉は決して一貫した像を結ぶことはない」と「新しい女性」を定義することの難しさを指摘している（武田,2003:3）。そうした中でも、多くの小説や雑誌で描かれる「新しい女」とは主に、結婚する機会があるのにも関わらず、「結婚しようとする女」、性的に奔放で、母性に向け、スポーツやハンティングに励み、合理服を着て自転車に乗り、選挙権を求めてガーガーわめきたて、都市で仕事をする表像がなされるという（武田,2003:31）。様々な研究者が「新しい女性」の定義を行うが、それは様々な要素を含み、一つの定義にたどり着くことができないことは、「新しい女性」の複雑さを物語っているといえる。「新しい女性」の「新しさ」は明確に定義することは難しいものの、前述した伝統的女性像とは違った価値観、行動をすることがその「新しさ」に含まれるのではないかと考えられる。

ここで注目したいのが、上記でも述べられているスポーツと「新しい女性」の関係性である。Sheila Fletcher は世紀末の女性解放の運動の中で、最も鮮明なイメージの一つとして、「新しい女性」がスポーツに関わる姿であると記している（Mangan & Park,1987:145）。また川本静子の著書『〈新しい女たち〉の世紀末』の中に「〈新しい女〉は自転車に乗って」という章があることが示すように、「新しい女性」の象徴の一つとしてサイクリングを挙げることができる（川本,1999:187）。よってサイクリングをはじめとするスポーツへの参加と、「新しい女」とは重要な関係性があると考えられる。家庭にいることを理想とされた 19 世紀前半の女性像とはかけ離れた、外で活動的になることを可能としたスポーツする女性は、スポーツしている女性自身、そして周囲にどのような影響を与えたのだろうか。

2. 女性のスポーツ参加の経緯

(1) 先行研究

まず、先行研究において 19 世紀の女性とスポーツがどのように扱われていたのかをみていく。1970 年代まで、歴史学者はほとんどスポーツに着目してこなかった (Mangan & Park,1987:1)。スポーツが取り上げられるとすれば、それは主にスポーツ界の人物によってであり、スポーツ・ジャーナリストなどであった。1970 年代以前、歴史学者による男性のスポーツについての研究も珍しかったことから、女性が対象の研究は存在していなかったといえる。W.J.Baker は「イギリス女性のスポーツの歴史は、まだ研究することがたくさんある」(“The history of British women in sports.... (筆者中略) stands high on the agenda of work to be done.”) と記している (Baker,1983:64)。つまり、女性のスポーツ参加を、社会、文化、政治、経済などを切り口に包括的に研究したものはほとんどなかったのである (Mangan & Park,1987:1)。

1970 年代になり、多くの有名な歴史雑誌が 19 世紀のスポーツに着目したことから、長く注目されてこなかったこの題材が脚光を浴びるようになった。1960 年代と 1970 年代の女性運動を発端としてこれまで注目されてこなかった女性やエスニック・マイノリティの存在感が増していく中で、女性達の歴史を見直す動きとなり、女性とスポーツが世に広がっていった。*Signs: Journal of Women in Culture and Society* という出版物を始めとし、多くの出版物が世に出た (Mangan & Park,1987:2)。ヴィクトリア時代という時代区分は学者にとって特に興味深い。それは、西洋文化で現代もある「正しい女性としてのあり方」という考え方が、ヴィクトリア時代に誕生したからである。しかしながら、女性に関して特にスポーツが女性の娯楽としてや、女性の解放のシンボルという観点から注目されることはあまりなかった (Mangan & Park,1987:3)。

これまでの研究で分かっていることは、19 世紀と 20 世紀のスポーツは、中流・上流階級においては女性と男性のジェンダーの違いを規定し、かつ強調するに至ったことである。また、多くの歴史研究は、女性の身体というコンセプトに注目し、女性・スポーツ・体育の関係性を見ていった (Mangan & Park,1987:3)。そしてこれまでの研究は、新聞やエチケットガイド、教育団体の発行物を参考にしてのものであった。これは結果的に、研究の対象を中流・上流階級に特に重点を置くことになった。しかし、労働者階級やプロフェッショナル職の女性は、少ししか関心が集まらず、未開拓の研究対象である。全体として、女性のスポーツ参加に関する研究は、まだ明らかになっていないことが多い (Mangan & Park,1987:3)。

Kathleen E. McCrone は「スポーツは様々なしきたりや、シンボル、偏見を含んでおり、

それは理想的な社会の価値観を映し出している」と指摘している (Mangan & Park,1987:98)。さらに、スポーツはどの社会の根底に存在し続ける性差を最もよく表しているものの一つであるという (Mangan & Park,1987:98)。スポーツは 19 世紀男性の領域とされていた為、その領域に女性が進出してくることは、男性と女性の役割の再定義を必要とし、男性領域に女性が入ることが許可されたことを意味していた (Mangan & Park,1987:99)。女性の教育や雇用、参選権の権利を巡る運動と違って、女性のスポーツ促進に関するキャンペーンは存在しなかった為、議論の中心になることはなかった。しかしながら、女性のスポーツ参加は女性解放の動きの中で大きな役割を果たし、男性と同じような権利獲得に貢献した。このように未開拓な部分が多い女性とスポーツというテーマは、具体的な運動がなかった為にあまり注目されることがなかったが、当時の社会に浸透する様々な考え方を理解するには重要なテーマであるといえる。

(2) 19 世紀後半以前の女性とスポーツ

イギリスには長いスポーツの伝統があるが、女性はその中で周辺的な存在として扱われた。19 世紀、人々は神が女性にいくつかの役割を与えたと考えていた。それらの役割とは、男性の協力者となり、彼の子供を育て、彼の家の神聖さを守ることである。彼らの理想の女性は、スポーツとは対極の存在であった。受身で優しく、感情的でデリケートである女性は、多大の努力が必要な運動や競技をやる体力とともにそうしたいと思う傾向もないとされた (Mangan & Park,1987:99)。よって、1700 年から 1850 年代までどの階級においても、女性がスポーツに活動的に参加することは少なかった (McCrone,1998:6)。

19 世紀後半以前の女性とスポーツとの関わりとして、まず受動的な女性のスポーツとの関わりが挙げられる。Jennifer A.Hargreaves は、「女性のレクリエーションへの参加は、活動性よりも受動性を表し、支配的であるというより補助的であることを示す」と指摘する (Mangan & Park,1987:133)。このことを明確に表すのが、スポーツの観戦者としての女性である。19 世紀中頃に中流階級が次第に勢力を増していく中で、女性 (妻) は男性の裕福さ、成功を表すもの一つとして男性の装飾品として機能した。その為に女性は綺麗に着飾り、裕福さを誇示した。こうした傾向がスポーツにも表れ、女性が綺麗に着飾って、乗馬、レガッタ、クリケットなどの試合を観戦することで、女性は男性の優越性を助長する役割を担った (Mangan & Park,1987:132)。

1850 年代以前、過度なスポーツは理想の女性に逆行するものであり、か弱い理想の女性に、精神的、身体的衰弱を招くと考えられていた。このような保守的な女性観が表れている絵がある。(図 1) のウィリアム・パウエル・フリスによって描かれた『麗しの矢の名手』 (*The Fair Toxophilites*) (1872) はアーチェリーの動きよりも、ファッションナブルなドレスを見せるように描かれている。構図には、動きや意気込みを感じることができず、どちら

らかと言うと女性達は自分達の魅力を誇示している（北条,1989:104）。



図1 : *The Fair Toxophilites*, William P.Frith

出典 : Royal Albert Memorial Museum, Exeter

<http://www.rammuseum.org.uk/collections/fine-art/a-gallery-in-the-gardens/the-fair-toxophilites>

2012年8月10日閲覧

次に、19世紀後半以前の女性の具体的なスポーツ参加について触れる。中世の女性は狩猟をしていたが、時代が変わると中・上流階級の女性は活発的な身体の動きを控えるようになった（Mangan & Park,1987:99）。1870年以前に、女性が許されていたスポーツは娯楽目的であり、競争がなく、ルールがないものに限られた（Mangan & Park,1987:154）。それらの条件に合致するものが、アーチェリー、ローンテニス（図2）、クロケット（図3）である。アーチェリーは過度な体力や「女性らしくない」動きを必要としないものであった為に、女性に認められた娯楽であった。1828年にスポーツ・ジャーナリストの Pierce Egan は、「アーチェリーは男性と女性の両方に公平に開かれたスポーツであり、（筆者中略）女性が唯一男性的であると非難されない娯楽である」と記していることから、19世紀後半以前から広く許容されたことがわかる（Egan,1869:251）。女性でアーチェリーをやる者たちは、スポーツを通じて男性的になることを心配されることはなかった。男性と女性は

いつも違う的を狙い、女性は女性に合わせた短い弓で短い距離で、女性の体力に合わせた弓の張り具合に調節してあったからである (McCrone,1998:155)。1845 年には York にて、初めて 11 人の女性達が全国アーチェリー大会 (Grand National Archery Meeting) に参加した。19 世紀の後半になり、アーチェリーが他のスポーツにとってかわっても、一般的に上品として認められていたアーチェリーは少数の女性達によって続けられた。ローンテニスは、フェミニンな洋服で女性達が参加したスポーツである。女性はコルセットで胴を締め上げ、ロングスカートに飾りのついた帽子、そしてヒールの高い靴を履き、パーティー用の盛装で、走ることが少なく、激しい動きを伴わないことから、女性らしいスポーツと認識されていた (McCrone,1998:28)。

教育の中では、ダンス以外の運動は排除された。唯一許されたダンスも、健康や体力の為ではなく、優雅な動きができることを目的としたものであった。典型的な女子校での運動は、シャペロンとの散歩 (Chaperon Walk)、ダンス、軽い美容体操・柔軟体操であった。それらは、体力やエネルギーを得る為ではなく、「女性らしい」イメージを作り上げるためである。女性が全くスポーツに参加していなかったわけではないが、これらの女性達は例外的とされ、スポーツが男性的な領域である考え方を変えるには至らなかった (Mangan & Park,1987:100)。

19 世紀中頃になると、イギリスの哲学者・社会学者である Herbert Spencer³ (1820-1903) が、女性が学校でスポーツをやらないことに対して疑問の声を上げた。しかし彼の主張は女性の権利の為ではなく、専ら将来イギリス人という人種が衰退しないように、健康的な母親を守る為であった。Herbert Spencer は、女性の身体的な弱さを当時の社会に広めた人物の 1 人である (Costa& Guthrie,1994:68)。

³イギリスの哲学者、社会学者、倫理学者。ダーウィンの進化論の擁護者で、適者生存 ("Survival of the fittest", "sélection des plus aptes") の造語者。



図2：ローンテニス（1874年）

出典：Punch, or the London Charivari, A Lay of Lawn-Tennis (October 10, 1874)

<http://library.sc.edu/spcoll/hist/tennis/lawn.html>

2012年12月22日閲覧



図3：クロケット（1870年）

Croquet Players, All-England Croquet Club, Wimbledon, 1870

出典：Mangan, J.A. and Parks, Roberta J.(eds.), *From 'Fair Sex' to Feminism: Sport and the Socialization of Women in the Industrial and Post-Industrial Eras*, London: Routledge,1987.

(3) 女性のスポーツ参加の障害

女性がスポーツに参加することに対する反論は、Herbert Spencer (1820-1903) の社会進化論 (Social Darwinism) や医学的観点からなされた (McCrone,1998:10)。ここでは、医学的観点からの反論をみていく。あまり女性の体に関する医学的な知識がない状態であるにも関わらず、1870年から1914年まで、女性の体とスポーツの関係性について多くの議論がなされた (McCrone,1998:192)。この医学的な理由は、当時の女性観、道徳観に影響され、密接な繋がりがある。

19世紀は科学が普及し進歩していった時代であったが、実質的に男性によって作られた科学的根拠は、当時のイギリスの様々な場面で、理由付けや正当化する為に使われた。このような科学的根拠は、決して正しいものではない場合も少なくはない。社会に普及する偏見や考え方を正当化する為に、科学者や医師らは証拠とするものを生み出したりした (McCrone,1998:192)。女性の権利を主張する女性運動が活発化し、男性優位の社会が揺らぎ始める危険性が高まるにつれ、このようなことはよくみられるようになった。科学者や医師らは、フェミニストの主張を攻撃し、女性の体の安全で正しい使い方を主張することで、伝統的な女性の役割を訴えた。

科学者らの主張は、男性と女性の身体的な違いに関しての見解が根本にある。それは女性は身体的に弱く、病気に弱い傾向あり、それがゆえに男性の特権である政治、教育、経済、スポーツの領域に関わる権利を剥奪されるというものである (McCrone,1998:193)。医学や科学が徐々に進歩した後も、彼らの主張は続いた。女性の高等教育が普及するにあたっては、医学に携わる Edward Clarke と Henry Maudsley は身体的な理由で女性が教育を受けることを批判するものを記した。彼らは医学的な地位があった為に、正当な主張であるかのように捉えられた (McCrone,1998:193)。女性の高等教育の普及にあたり、身体的に弱い女性は、思春期に休むことの重要性が訴えられた。

多くの医学者は、女性は全ての臓器や組織にいたるまで身体的に弱い、ということを前提に女性の教育をつくることを訴え、そうでないと女性たちの心と体を破壊してしまうと考えた (McCrone,1998:193)。男性と張り合うことは、生殖器の機能を弱め、無性の生き物を生み出し、子供を産めない状態に至るとも主張した。男性の考えとは違うことを主張していた女性の医学者達がいなかった訳ではないが、女性の医学者の数も少なかった為に、認められることは難しかったのが事実である (McCrone,1998:194)。

ここでスポーツの種類によって、様々な考え方をされていたことを指摘したい。例えば女性が乗馬することは、当時の医学的な見解から反対され、ヘルニアを招くと考えられた。さらに、女性のモモは男性のように長くて平らではなく、丸くて太っている為、サドルで馬をしっかり押さえつけることができなく、危険だと言われた (McCrone,1998:200)。加えて、医学雑誌は女性が跨って馬に乗ること自体を「見た目が魅力的でない」と批判した

(McCrone,1998:200)。テニスは、全体的に認められていたスポーツの一つであり、片方の手を使いすぎて、手が曲がらない程度に良いとされた。サッカーに関しては、その危険性が唱えられた。例えばボールが当たることで生殖器や胸への危険性が訴えられた。ボートや水泳は、心臓に悪いとされ、水泳に過熱し過ぎると、髪の毛が真っ白になってしまうとまで言われた (McCrone,1998:201)。ホッケーに参加することについては、母乳に悪影響が出るとされた (Mangan & Park,1987:135)。

医学的な観点から、女性がスポーツに参加することを批判するのは、男性に限ったことではなかった。女性で医師の Arabella Kenealy (1859 - 1939) はその代表的な 1 人である。彼女は女性の教育や雇用の拡大を支持したが、運動については健康の為に必要であることを認めつつも、過度な運動は女性を男性化させるとした。その上で、女性の最も大切な役割である子供をつくることであるとし、子供を産むためのエネルギーを無駄にするべきでないと訴えた。そしてこの役目を果たせない女性は、人間として失格であるとまで考えた (McCrone,1998:207)。彼女の見解によると、少女期に運動を経験した女性は、乳房、生殖器に問題を招き、結果的に子供を産む機能を失う。また彼女らは神経質や心臓病になる傾向があるという。そして 1 日に 4 マイル歩いた女の子がそのことが原因で難聴になったことを例として挙げた。さらにスポーツは身体的に有害であるだけでなく、若いスポーツをする女性は醜いとし、その醜さはスポーツの有害さを示していると言った (McCrone,1998:207)。よって、彼女の主張によると、女性に必要な運動は、家の中でやる家事程度のものであった (McCrone,1998:208)。女性がスポーツに参加することに対する医学的な観点からの反論は、20 世紀初頭になってもなくなることはなかった。

(4) 女性のスポーツ参加の契機

前節では女性のスポーツ参加を孕む様々な要因をみていったが、本節ではそうした障害の中でなぜ女性がスポーツの世界に進出していったのかを探る。

(4) - 1 健康への関心

スポーツは従来、王侯貴族、それも男性の専用物であった。スポーツが流行したのには、いくつかの要因がある。まず、19 世紀末に健康への関心が高まったことが挙げられる。1884 年の国際健康博覧会はそれを象徴する出来事であるといえる。そしてスポーツと健康が議論され、女性の参加の必要性が唱えられた。このことを受け、19 世紀後半に公園などの公共の場でスポーツ施設が建設された。

また貴族社会では働かないことを美德として、白い肌が美德であった。これに対して、ブルジョワジーはたくましい肉体を理想とし、スポーツをするようになった。女性の教育改革が行われたのも、将来母親になる女の子達の健康への懸念があったからである。さら

に、これまで男性のみが対象であった精神の健康と身体の健康の関連性が男性だけでなく、女性にも適用される考えが次第に普及していき、女性雑誌を通じて女性が健康を害している原因に運動不足があることが認知されていったのである (McCrone,1998:15)。

(4) - 2 女子高等教育の普及

Kathleen E. McCrone は、女子高等教育でのスポーツの普及が 19 世紀後半の女性のスポーツ参加に大きく貢献したと指摘する (McCrone,1998:127)。女性の大学の設立に関わった者たちは、女性が運動によって体を鍛える権利があると考えていた。この背景にあるのは女性が高等教育を受ける体力がなく、もし高等教育に体力を消費してしまったら、女性に求められる出産に必要な体力を失ってしまうとする、当時の女性の高等教育に対する反論であった。ハーバード大学の Edward Clarke とユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの Henry Maudsley (1835 - 1918) は高等教育を受けることで、女性は貧血、てんかんを起こすまで主張した。これに対して女性高等教育を推し進める者たちは、この反論が成立しないことを示す為、女性たちが高等教育に耐えられる体を鍛える重要性を訴えた (McCrone,1998:22)。

大学での女性のスポーツ参加が始まったのは、1869 年に Emily Davies⁴ (1830 - 1921) が高等教育を女性に広げる活動に伴うものである。高等教育改革の初期の頃から彼女は女性の健康被害を訴えてきた。1870 年代に初期の女性カレッジが設立された時、スポーツが導入され、大学生活に欠かせないものとなっていた (McCrone,1998:24)。当時、スポーツをする施設が不足していた為、1877 年には大学に体育館が建設された (McCrone,1998:26)。Girton College⁵から始まった女性の高等教育にいけるスポーツ参加は、他のケンブリッジ大学のカレッジに広がっていき、オックスフォードでも同じような動きがみられた。より多くの大学がスポーツを取り入れ、クラブを作ることで、大学のクラブ同士のつながりが生まれ、対外試合が可能となった。1880 年代初頭から、Girton College はロンドン大学の女子カレッジをはじめとする他大学と対外試合を始めた。対外試合は大学の卒業生、在校生、親族や友達など、比較的閉鎖的な空間で行われていた為、世間から非難させる危険性が少なかった。試合が公開された範囲が狭かったものの、多くの人に女性がスポーツをする姿をみせるきっかけになったのである。

大学でスポーツが盛んになっていくにつれ、大学内にスポーツ施設が作られた。Girton College で当初から人気であったローンテニスに関しては、初めはコートがなく、食堂の外でやっていたものが、1890 年代に入ると 8 つのコートが備えられた。スポーツ施設が設備

⁴ イギリスのフェミニスト運動者。イングランド初の女子大学の Girton College の設立者の 1 人であり、校長を務めた。

⁵ 1869 年創設のケンブリッジ大学を構成するカレッジの 1 つ。設立当初は、エミリー・デイヴィスによりイギリスで初めて女性のために作られた全寮制のカレッジであった。大学側が女性を学生として正式に認知しなかったことから、長年学位取得権を求めて教育を続けてきた (Girton College ホームページ)。

されたことで、女子学生のスポーツ参加の機会が増えた。そしてサイクリングに関しても、**Girton College** なしでは語れない。1890年代にサイクリングが流行すると、本カレッジの学生もサイクリングの虜になった。1894年にはサイクリングクラブが作られ、大学は自転車の置き場所に頭を抱えた。そして、1910年までには160台の自転車の置き場所が作られた (McCrone,1998:26)。女性が自転車に乗ることは世間から非難されることもあったが、学校側が自転車用の駐輪場を作ることは、自転車に乗る女性を支持していたともいえるのではないだろうか。

カレッジのスポーツチームは次第に大きくなり、1886年にはローンテニスのチーム **Girton College Lawn Tennis Club Honorary Members Association** に63名のメンバーが記録されている (McCrone,1998:28)。これは当時の生徒数が114人であったことから、半数以上が所属していた計算になる。この数からも、当時多くの女子学生がスポーツに取り組んでいたことがわかる。ローンテニスに続き、これまで世間から「女性らしくない」(unladylike)と認識されていたホッケーやラクロスのチームも作られた。1914年頃には、ゴルフ、ラケット、クロケット、フェンシング、水泳、ボート、サイクリング、新体操、など多岐に渡った (Mangan & Park,1987:107)。スポーツが広く普及した **Girton College** であったが、男性のカレッジである **Jesus College**⁶のように女性達は運動競技中心主義であったわけではない。常に生徒達は学業を第一としていた (McCrone,1998:26)。

このように大学やカレッジでスポーツを経験した女性達は、試合においては壁に囲まれ、あまり世間の目に触れることはなかった。しかし、彼女達がカレッジを卒業し、女子のパブリックスクールの女教師として働いたことで、大きな影響を与えた。1860年代に男子のパブリックスクールに導入されたゲームズ (Games) やスポーツを真似て、1890年代に女子パブリックスクールにそれらが導入された。この背景には、カレッジでスポーツの楽しさを知ったオックスブリッジ卒の女教師たちの貢献がある。彼女たちは、自分の生徒たちにもスポーツをすることの楽しさを知って欲しいと思った。もちろん彼女達は学業を一番に考えたが、その次に男女ともに教育の中でスポーツは重要性を唱えた。彼女たちは、女性がスポーツに参加することのメリットとして、健康の向上、ストレスの軽減、学力の向上、秩序を保つことを主張した。さらに、これまで男性にのみ備わっているとされていた勇気、忠義、決断力が期待出来るとした (Mangan & Park,1987:107)。女子パブリックスクールにスポーツが導入されると、クリケットや体操をはじめとするハウス (寮) 対抗のスポーツ大会が開かれたりした。1914年になる頃には、平均して毎日1-2時間の運動をする学校がほとんどとなり、試合を行うために地域のスポーツリーグが結成された。この頃には生徒たちは運動に熱中し、ハウス対抗の試合や他校との対抗試合には生徒のほとんどが参加していき、次第にスポーツは女子教育の中に存在感を増していった (Mangan &

⁶ ケンブリッジにある1496年創立のカレッジ。スポーツ競技場が充実している。ボート部はケンブリッジ大学のカレッジの中でも盛んな方で、カレッジ間のレースでは常に上位に入っている (Jesus College ホームページ)。

Park,1987:114)。

(4) - 3 スポーツの楽しさの発見

先行研究では、「家庭」という領域からの解放や、女性としての権利獲得の為といった主張のために女性たちがスポーツに参加していったというものが多い (Mangan & Park,1987:121)。例えば 19 世紀の代表する作曲家の Dame Ethel Smyth (1858-1944)は、女権運動家でありスポーツウーマンであったことが並列して挙げられる。Dame Ethel Smyth のように女権運動家の中にはサイクリングをはじめとするスポーツに参加したことは事実であるが、19 世紀後半の女性たちが全て女性の解放の為にスポーツに関わったのかは疑問が残る。サイクリングを例にとってみても、初期のサイクリストは新しい装いでサイクリングしていたものの、ほとんどが女権運動家ではなかった (McCrone,1998:187)。さらにホッケーというチームスポーツに関しても、「女性がホッケーに参加したことを女性の抵抗だと捉えるのは真実をゆがめており、初期の人々はホッケーそのものをしたというそれだけの理由でホッケーをしたのであり、他の目的があったのではない」といえる (McCrone,1998:137)。

そこで女性がスポーツを女性解放の手段としてではなく、他の目的の為にしていたことが考えられる。Kathleen E. McCrone が「大学でスポーツしていたほとんどの女性たちは、楽しいからスポーツをしていたのであり、女性の権利を守るためではなかった」と指摘するように、19 世紀後半の女性とスポーツの関わりを全て女権運動と結び付けることは難しいといえる (McCrone,1998:52)。よって、女権活動家などの一部を除いて、一般的な女性たちがスポーツの領域に次第に進出していったのは、スポーツを娯楽としてその楽しさを知ったことが大きいのではないかと考えられる。前節で述べたように、大学でスポーツの楽しさを実感した卒業生がその楽しさを伝えたいという思いから女子パブリックスクールにスポーツが導入されたのであり、スポーツ自体の「楽しさ」という面は無視できないのではないだろうか。

3. 女性とサイクリング

これまでスポーツが女性に浸透していった背景を探った。そこで本章はスポーツの中でも、サイクリングに着目する。サイクリングに焦点を当てる理由は二つある。一つ目は、サイクリングが「新しい女性」のシンボリックな機能を果たしていたからである。そしてサイクリングに着目するもう一つの理由として、サイクリングが幅広い人々に楽しまれたものであったからである。少ない人々しか参加しなかったホッケーやテニスなどの他のスポーツとは違い、サイクリングはそれまで運動をしていなかった女性たちも参加したことが大きな違いである (McCrone,1998:184)。よってスポーツという漠然としたものよりも、サイクリングというより具体的なスポーツと女性の関わりに焦点を当てることで、なぜ女性達はスポーツに熱中したのか、そしてスポーツが当時の女性に与えた影響をより具体的に明らかにする。

(1) サイクリング流行の背景

(1) - 1 サイクリング流行の実態

サイクリングが男女問わず流行したのは 1894 年であり、翌年 1895 年にはブームが最高潮に達した (Rubinstein, 1997)。当初、自転車は高価だったので利用者はもっぱら上流階級に限られていた。金と時間に余裕のある者にとって、空気の汚い都会から澄んだ空気の味わえる田舎への週末のサイクリングは格好の娯楽であり運動となった。しかし、量産体制の確立や中古品の再利用により、自転車は次第に中産階級に普及していった。サイクリングは中流階級を中心に、全ての階級をまたがって流行した。数値で見ると、1895 年から 1897 年のブーム時期に自転車の年間生産台数は 75 万台、1890 年代半ばのイギリスの総人口は 3500 万人との比率を考えると決して小さくはない (川本,1999:187)。

それでは、サイクリングと女性の間にはどのような関係があったのだろうか。『ニュー・ガール 1880 年から 1915 年までのイギリスにおける文化』の著者サリー・ミッシェルは、「典型的なニュー・ウーマンのイメージは、濃い色のスカートをはき、ワイシャツ風の白いブラウスを着て、自転車—このおかげで町のなかや田舎を思いのままに走りまわる自由が得られたのだが—のわきにたつ、若い健康な女性である」と、新しい女性とサイクリングの関係性を述べている (川本,1999)。さらに *Illustrated Sporting and Dramatic News*⁷ という週刊誌には、1896 年から「スポーツ女性のページ」が始まり、自転車やサドルの紹介がある。また *The Lady's Realm*⁸ という女性雑誌には「女性のサイクリング熱」(1896

⁷ 1874 年から 1945 年まで続いたスポーツと演劇を中心とした週刊雑誌。

⁸ 1896 年に創刊され、1916 年まで続いた女性雑誌。価格は 6 ペンスの月刊誌。連載小説、

年) というタイトルの記事が Eliza Lynn Linton (1822–1898) によって書かれている。この記事は、女性が自転車に乗ることを批判したもので、下品であることが指摘されている。1890年代以前にもサイクリングは流行していたものの、女性が乗ることについては批判的な見方をされていた。19世紀の自転車の流行は、『パンチ』で何度となく取り上げられた。1869年5月15日号の『パンチ』では、当時男性の間で流行していた自転車に女性が乗るとしたらどうなるかを描いた風刺画が載せられた。風刺画には女性が自転車に乗ると、馬と同じように横座りになると予想している。

(1) - 2 自転車の技術革新

19世紀末に流行したサイクリングは、実はそれ以前から楽しまれていた。フランスのド・シヴラック(de Sivrac)は、1790年にフランスで車輪を2つ前後に連結させて、木馬のように上にまたがり、足で地面を蹴るものを考案し、自転車の原型とされている。フランスで開発されたこの自転車は木製の棒で作られた簡素なものであった(Bijker,1997:7)。後にイギリスがハンドルによって操作できる自転車を開発した。そして三輪車が開発され、1834年には木造ではなくなった。さらに産業革命の恩恵により、鉄とゴムが普及し、スポーツ用具の普及に貢献した。しかし、それらの自転車は高い位置に座ることにより、万が一道に石などあった場合、高い位置から頭から転落してしまう危険性を伴った。

19世紀前半にも女性が自転車に乗る姿が記録されている(Cunning & Mansfield,1965:246)。サイクリングがサイクリング熱として流行したのは、19世紀末であったが、それ以前にも上流階級で流行していた。初期の女性の間での流行では、サイクリングをする為に馬車で公園まで向かい、そこでサイクリングを楽しむという優雅なものであった。その際、サイクリングを楽しむというよりは、当時の上流階級のみしか手に入らなかったスポーツの衣装を披露する為であった。

ではなぜ1890年代に急速に普及することになったのだろうか。その答えは80年代の二つの重要な技術改良にある。一つ目は、ジョン・ケイプ・スターリーによってセーフティー型自転車(Safety bicycle)が開発されたことである(図4)。この自転車の特徴は、前後輪の大きさが同一であることである。これまでの自転車は、前輪と後輪の大きさに三倍もの違いがあり、結果的にバランスが悪く乗りにくかった。さらにセーフティー型自転車の特徴として、後輪チェーン駆動方式やダイヤモンド型フレームが採用されたことが挙げられる(前田他,1993)。特に女性用のセーフティー型自転車が販売されて、女性が自転車に乗るようになると、サイクリングは爆発的なブームを迎えた。二つ目の技術革新はジョン・ボイド・ダンロップによって、自転車用の空気入りタイヤが導入され、自転車の性能が向上したことである。それまで自転車のタイヤは鉄にゴムを張っただけであったが、イギリスのダンロップがゴム製の空気入りタイヤを発明し、悪い道でも楽に走れるようになった

家庭生活一般、職業、ファッションに至るまで当時の女性の関心事を幅広く網羅している。中でも当時若い女性に人気のスポーツに関する記事を取り上げていた。

(佐々木,2005:91)。この自転車は現在の自転車にほぼ近いものである。これらの技術革新により、自転車が誰にでも容易、そして安全に乗れる乗り物に改良された。こうした自転車の改良に加えて、ヴィクトリア女王の存在も大きかったといえる(図5)。1870年代、自転車はヴィクトリア女王が自分と子供たちの為に注文したことから、注目が集まった(McCrone,1998:178)。その後、多くのジャーナリストが女性のサイクリストを特集するようになった。



図4：セーフティー型自転車

出典：Hills, Larry., *The Great Inventions The Bicycle*, Minnesota: Capstone Press, 2005.
p17



図5：ヴィクトリア女王と自転車

出典：<http://www.gracesguide.co.uk/images/5/51/Im1932Bart-Page22.jpg>
2012年12月11日閲覧

(2) 自転車女性が女性に与えた影響

(2) - 1 行動の自由と精神の自由

まず、サイクリングは簡単に街に出かけることを可能としたことで、女性の活動範囲を広げた。18世紀後半、イギリスで起こった産業革命は鉄道という画期的な輸送手段を生み出し、時間と金にあまり余裕のない一般庶民も手軽に旅行を楽しめるようになった。だが、鉄道はあくまでも大量輸送手段であり、1人で自分の好きなところに行くことはできなかった。このとき存在した唯一の個人輸送手段は馬車であったが、自家用馬車は非常に高価だった為、王侯貴族など上流階級しか持つことができなかった。また、これまで未婚の女性が外出する際は、必ずシャペロンという年上の女性がついていた。しかし自転車の流行によって、親の監視から逃れられることができ、1人で外出することが可能となった。加えて既婚者の女性は「家庭」という閉じ込められた空間から解放されることにつながった（小森,1990:42）。さらに、自転車のハンドルを左右に切り、自由自在に進路を選択できるサイクリングは、自らの判断で生きる道を選びという、従来まで美德とされていた服従する女性とは正反対のことを可能とした（川本,1999:186）。

(2) - 2 女性らしい服装からの解放

自転車の登場とその流行は女性服に大きなインパクトを与えた。イギリスの服飾歴史家である James Laver (1899-1975)は「その影響の大きさにおいて、火の発見や印刷術の発明に比する」と指摘する（Laver, 1937: 71-72.）。

19世紀の女性服は、機能性や着心地よりも、女性美や裕福さを表現することを期待された。女性は家政婦に手伝ってもらいながらコルセットを締め、スカートを膨らますペチコートをつけた。それに加え生地を多く使った服を着ていた為、女性たちのファッションは体に大きな負担をかけていた。服装に美しさを求める背景には、19世紀の中流階級が重視していた価値観に「勤勉にはたらくこと、自己を改革すること、尊敬に値する態度」があった（日置,2006:81）。その上で理想的な女性は、可愛らしく、慎み深く、大人しく、恥ずかしがりやで生真面目な女性とされていた。彼らの美德は服装に反映され、大胆で気取りすぎの装いを排除し、上品で誠実に見える服装が好まれた。妻の華やかさは、社会的地位を表す為、その有閑な生活態度を示す為に腰を細く見せるコルセットや重いスカートを好んだ。また何もしていないを示す為に、パーティーではもちろんのこと、家庭にいるときでも手袋をしていた。女性が自分たちの地位を誇示する為に参加を許されたスポーツにおいても、スポーツを楽しむための服装というよりも、ファッションナブルな装いで美しく着飾った自分を見せることを重視したのである。

一方で、女性を美しくみせる服は健康を害するものであった。女性美術史家メリフィーは『芸術としての服装』の中で「コルセットは流産や奇形児出産の原因になる」と当時

の服を批判した(日置,2006:115)。医学関係者はコルセットによるウエストの引き締めを問題視し、締め付ける下着や服が女性や少女の適切な運動を妨げていると警告した。コルセットは体に相当な圧力をかけている為、めまいや頭痛、循環不良などの害を与えていたが、当時コルセットと健康被害の因果関係を医学的に証明することはできなかった。

長いスカートをはいたままのサイクリングは、乗りにくいだけでなく危険なものであった。構造上、自転車をこぐのにスカートは適していない。地面すれすれの長いスカートでサドルにまたがることは困難であり、スカートがタイヤに絡まる危険性を伴っていた。また丈も長くボリュームもある当時のドレスでは、タブーである脚を見せることになってしまう。そこで、かつて周囲の非難と嘲笑で忘れ去られていた服が再びファッションの舞台に戻った。

前述の通り、当時の服装でサイクリングすることは乗りにくいのみならず、非常に危険であった。当初、長いスカートをはいても安全に乗れるように自転車の方を改良しようとした動きもあった。しかし、次第に自転車の改良から服装の改良へと路線が変わった。始めに提案されたのが、ロングスカートの下に錘をつけてスカートのすそが上がらないようにしたものであった。それは当時女性が足をみせることが良くないと考えられていたからである。だが、いくらスカートに改良を加えても、結果的にスカートがペダルに絡まったりすることで危険であることに変わりはなかった。そこで考案されたのが、「ディバイデッドスカート」であった。これは二股になったパンツスカートであり、合理服協会9の会長の名前をとって「ハーバートン」とも呼ばれた。19世紀女性が身に着けていた身体を締め付けるコルセットや重いスカート、ペチコートを取り除くために考案された。20世紀初めまで、法律で女性が二本足に分かれたパンツをはくことが禁止されていたこともあり、女性のパンツスタイルは社会の抵抗が強く、公の場ではくことが許されなかった。その為、パンツのように見えないスカートのような服にする為に、スカートとパンツを融合されたスタイルが編み出された。初期のものは下着のパンツのひざの位置に、表地の布で装飾をつけ、スカートの裾のように見せかけている(日置,2006:117-118)。

次に若い女性達の間で流行したのが「ブルマースタイル」であった。ブルマー服はサイクリング・ブームの40年ほど前にアメリカで生み出されたものであり、決して新しいものではなかった。オスカー・ワイルド夫人コンスタンス・ロイド(1859-1898)などが進んでブルマーを着用したものの、一部の人にしか賛同を得られずに普及することにはならなかった。体に優しい、動きやすい服であったのにも関わらず、考案されたときにイギリスに導入された際、嘲笑の対象となっていた。転機となったのは、自転車が普及し、サイクリング・ブームが巻き起こったからである。サイクリング・ブームによって、機能的な服を着ることでサイクリングを楽しみたいという気持ちもあったが、むしろ自分のサイクリングの服装を見せたいという気持ちの場合も少なくなかった。そのことを表すパンチの描写が

⁹ 1881年にフロレンス・ハーバートン子爵婦人を中心に設立され、男女ともに健康で快適、美しい服装を着用できるようにと運動を開始した(日置,2006:116)。

ある(図6)。

ガートルード「まあジェシー、その自転車服は一体なんのためなの？」

ジェシー「もちろん、着るためよ」

ガートルード「でも、あなた自転車持ってないのに」

ジェシー「自転車はないわ。でもミシンは持ってるもの」(北条,1989:129)



図6 : Cartoon from Punch, 1895.

出典：北条文緒、クレア・ヒューズ、川本静子編 『ヒロインの時代 別巻 遙かなる道のり イギリスの女たち 1830-1910』国書刊行会 1989年 p129

このように女性たちが自転車に乗ることは、これまで体に負担をかけていた服装や、危険を伴っていた服装からの解放につながった。さらに、自転車に乗る女性のみならず、自転車に乗る女性のかっこよさが当時の若者の間に広まり、自転車に乗らない者までもが、自転車ファッションを楽しむようになったのである。

(2) - 3 男性領域への進出ークラブー

1892年に女性初のサイクリングクラブ「コヴェントリー・レディー・サイクリスト」(Coventry Lady Cyclists)が誕生した。コヴェントリーはもともと、自転車産業の中心的な土地であった。この女性による女性の為のクラブの設立は大きな注目となった(McCrone,1988:182)。それまでのクラブとは、男性の占有領域であったからである。クラブとは会員制の社交の場であり、上流階級の人たちが共通の政治思考や社交目的、また共通のバックグラウンドを持った人たちが集う憩いの場として設けられており、完全女人

禁制であった(桑原,2007:90)。クラブに女性を認めない理由として当時挙げられていたのは、
“They were unfitted for club life because they were not so broad-minded as men and were apt to be arbitrary and tyrannical when in authority.”「クラブに参加するには女性は男性のように寛容ではなく、権限を持ったときには独断的で暴君的になりがちである」と、女性が男性より劣っており、クラブには適さない考えを示している (McCrone,1988:181)。1870年代に誕生した、郊外に自転車で行くツアーなどを企画する Cyclists' Touring Club (CTC) は始め、男性のみ参加可能であったものの、サイクリング・ブームを受けて女性を受け入れ始めたが、女性専用のクラブは存在していなかった。

1885年、Lady Cyclist Association というクラブも誕生し、1890年以降は女性のサイクリングクラブが次々と誕生した。さらに保守的な女性達のために、シャペロンを同伴することのできる小旅行やツアーを企画する Chaperon Cyclists' Association (1896)も誕生し、様々な女性に合わせたクラブが生まれた (McCrone,1988:182)。

クラブは、女性の社会への進出やファッションの改革に大きな役割を果たした。専用のクラブは、女性のサイクリングの為に月刊誌を発行した。また、メンバーの中には女性のサイクリングに関する本のベストセラーを刊行した作家もいる。Lady Cyclists' Association の創設者の1人である Lillias Campbell Davidson は *Hints to Lady Travellers* (1889) というベストセラーの作者であり、サイクリングが女性の社会での束縛を解放することを主張した。さらに同クラブは女性が運動に適した格好をするべきだと主張し、メンバーは新しい女性のファッションを提唱した (Wosk, 2003:98-99)。

(3) 女性サイクリストと世間

(3) - 1 反対論—道徳的側面

サイクリングする女性は、世間から冷たい視線を浴びた。その例として作家で女権拡張論者の Helena Swanwick (1864-1939) は 1890年代にマンチェスター近くで夫とサイクリングしていた際、工場の従業員、バス運転手などから嫌がらせを受けた。さらに女性の婦人参政権論者の Dame Ethel Smyth (1858-1944)は、1890年代に自転車を買うことを女友達に伝えたところ、彼女が自転車に乗ることを「下品」と捉え、ぞっとした反応をしたという (McCrone,1988:179)。このように世間がサイクリングする女性達にネガティブな感情を抱く理由は、道徳的側面、身体的側面に分けることができる。

まず、道徳的側面からの反対論にふれる。多くの反対論は、サイクリングが女性の魅力、モラル、そして女性らしさを奪うという意見であった。「当世娘」(Girl of the period) の批判家として有名で、終始一貫「良妻賢母」のイデオロギーを貫いた Eliza Lynn Linton (1822-1898)は、女性らしさを奪うという理由から女性がサイクリングすることに反対した (川本,1999:2)。彼女にとってサイクリングする女性は、彼女の考える「新しい女性」の象徴で

あった。その女性とは家を捨て、両親に背く人であり、女性の魅力のかけらもないと考えた (McCrone,1988:177)。

女性らしさを奪うという主張のもうひとつの側面として、子供を産むことの妨げになることが唱えられた。自転車への熱中が脅かすと懸念されていた女性の本質とは、出産能力である。こうした女性の社会的役割をめぐる道徳的な主張は、家庭にとどまる母こそが女性の理想であり、母性つまり出産が女性の活動の目的であるという主張と切り離すことができない。サイクリングの足の位置は産道を狭め、サイクリングの振動は出産に重要な骨盤や子宮に異常をきたすといわれた。ゆえに女性性を奪うのみならず、結果的に出生率に影響がでるとされた (McCrone,1988:177)。自転車による女性らしさの抹消への危惧が様々な言説を生み出したといえる。

(3) - 2 反対論—身体的側面

前節の道徳的側面からの反対論に加えて、サイクリングの反対論を盛り上げたのが医学的な語法に基づくものでもあった。第2章でふれた女性のスポーツの障害としての医学的な観点からの反論が他のスポーツと同様、サイクリングにも向けられた。科学者、医師はサイクリングが体に及ぼす医学的な研究がされていないのに関わらず、サイクリングが女性の健康に悪影響を及ぼすと主張した。その一つが、体の変形である。サイクリングは腕、手、足を変形させ、“Cyclists’ humps” と呼ばれる体の湾曲を引き起こすとされた (McCrone,1988:179)。さらに、サイクリングは女性の顔にも悪影響を招くと警告された。女性が自転車の乗り方を学ぶストレス、そして事故が起こらないようにしようとするストレスは、“Bicycle face”という強張った、心配でやつれたような顔を結果的に招くと予想された (McCrone,1988:179)。また、自転車のハイギアを使うことは女性の限度を超す、多大な努力を必要とする足と手の動きによって、心臓に負担をかけ、下肢の静脈が拡張し血液が滞ることで起こる下肢静脈瘤を引き起こすと警告された。このように世紀末の自転車をめぐる言説を概観すると、男性の自転車利用がほとんど問題視されないのに対し、女性が自転車に乗るということに関する女性の身体をめぐる様々な幻想が投影され、女性たちが自転車に乗ることを反対されたのである。

(3) - 3 世論の変化

女性サイクリストに対して、道徳的、医学的観点から批判がなされたが、全ての人が反対していたわけではない。女性がサイクリングすることについて最も説得力のある主張を展開したのが、医師の W.H Fenton である。彼は医学的観点から展開される女性のサイクリングの医学的悪影響は、実験によらない根拠のないものだとは非難した。そして、女性が男性より体力がないのは女性がスポーツから排除されていたからであるとした彼は、サイクリングが女性にとって理想的なスポーツであり、娯楽の為だけでなく、筋肉や心臓の強化が見込まれ、個人としてもコミュニティーとしても良い効果が期待できると訴えた

(Fenton,1896:798)。

女性とスポーツの反対論が次第に少なくなった背景に、サイクリングの上流階級への進出が挙げられる。王室の女性、貴族、上流階級の女性たちが熱狂的なサイクリストになることで、世間に受け入れられるようになった。フランスの貴族達の間で自転車レースのブームがあったことが上流階級の間でサイクリングが普及した背景にあるのではないかと考えられる。当時、実用性よりも遊びとしての要素が強かった自転車は、時間とお金に余裕がある上流階級にまず広まり、それが中流階級へと広がっていったと言えよう。Kathleen E. McCrone は「自転車を<適切な>人々が乗ることによって、下品で危険ではなくなった」と述べているように、貴族などの上流階級の存在の大きさを無視することはできない (McCrone,1988:181)。上流階級の女性が自転車に乗ることで、上流階級の女性は上流階級以外の人々の真似る対象、つまりお手本となった。そして親の反対や医学的な反論に目を向けず、何万ともいう女性たちがサイクリングに熱中したのである。こうして上流階級にサイクリングが普及していくことで、女性のサイクリングに対する世論は一変した。女性は体力がないから、自転車には向いてないとするこれまでの反対論を覆すかのように、女性が特に筋肉質でがっしりとしていなくても自転車に乗ることができるという考え方をほとんどの人がするようになった (McCrone,1988:181)。また 1897 年 5 月の *Lady Cyclist* には、「サイクリングは乗る人の体力に合わせた乗り方をすると、娯楽という観点からも健康という観点からも効果的である」とサイクリングを擁護する立場にある (McCrone,1988:181)。

4. スポーツする女性と世間

これまで女性がスポーツに参加していった背景を考察した。本章では前章を踏まえ、そうした女性達が世間からどのように見られていたのかを検証する。Kathleen E. McCrone は、19 世紀後半になって女性が次第にスポーツの領域に進出してきたことについて、世間からは完全に受け入れられたとはいえないと主張する。「男性がスポーツすることは、自然であり、望まれており、重要であるのに対して、女性についてはこれまでと同じように不自然で、おかしく、取るにたらないと見られていた」という (Mangan & Park,1987:53)。このことを表すものとして、20 世紀初期になっても *The Times* や *The Oxford Magazine* という雑誌において、男性のスポーツ活動は取り上げていたものの、当時オックスブリッジの女性スポーツに関することが無視されたかのように掲載されなかったり、取り上げられたとしても非常に短いものであったと指摘する (Mangan & Park,1987:51)。

さらに女性が参加したのが、全てのスポーツではなかったことも重要である。女性たちがより技術を必要とし、体力の必要なスポーツに参加していったことは確かだが、クリケットをはじめとする男性的と思われていたスポーツをすることを女性達は避けた。女性らしさを奪うとみられたものや、男性の優位性を脅かすこと最小限にする為に、そのようなスポーツに積極的に参加しなかった。よって、19 世紀後半の女性たちは完全に男性と同じような種類のスポーツに参加し、スポーツにおいて男性と同じ立場、権利を獲得したとはいえない。女性がスポーツに参加する機会が増えたのは、1960 年代の第二次フェミニスト運動を待つまでほとんどなかった。

女性の参加したスポーツの中でも、世間からの受容の違いを指摘したい。例えば、個人競技のスポーツはチームスポーツより受け入れられた。それは、チームスポーツより個人スポーツの方が美的なイメージであり、男性的ではないとされ、男性の立場を揺らがす脅威として受け取られない傾向があったからである。個人スポーツの多くは特権階級に限られたクラブで行われたものであったこともあり、そこで行われる競技は美的で男性的すぎないというイメージがついた (McCrone,1998:154)。対してチームスポーツの試合は大勢の人に見られることになり、女性にとって公衆の前でスポーツをする姿を見せるのは不適切であると批判された (McCrone,1998:133)。

では、スポーツに参加する女性は、何も意識改革をもたらさなかったのか。まず、スポーツをすることで女性たちの中での意識の変化があった。そしてスポーツする女性を支持する人々もいた。これまで女性がスポーツに参加することの反論として、女性のか弱さ、体力のなさを挙げ、スポーツに不適切だという主張が一般的であった。だが、スポーツが女性の間で普及することでこの考え方に変化が見られた。例えばホッケーが女性の間で普及していくにつれ、ホッケーが女性たちに身体的・精神的悪影響を与えていないことが明らかとなり、ホッケーが女性に不適切だとする主張の説得力が弱まった。そしてホッケー

によって多少怪我をしたとしても、それを通して協力、我慢、自助努力など国にとっても望ましいことを学べるという考え方も現れた (McCrone,1998:135-136)。サイクリングの章でも取り上げたが、スポーツが上流階級に普及していく中で、中流階級のお手本となる人々がスポーツに参加したことで、女性とスポーツの否定的見方に変化が見られ、肯定的な意見が見られるようになった (McCrone,1988:181) 自転車に対する肯定的な考え方の変化の背景には中流階級の上昇志向の強さがあり、上流階級を真似るという傾向がスポーツにおいてもみられ、上流階級がスポーツをやっているならばそれは正しいという考えの変化が起こったのではないかと考えられる。

おわりに

本論は19世紀後半のイギリスの「新しい女性」に着目し、彼女達がスポーツに参加したことの意義、そしてその結果どのような意識改革をもたらしたのかを論じた。

第1章では「新しい女性」が誕生する経緯を追った。まず、「新しい女性」が誕生する以前、中流階級に浸透していた女性の理想像の「家庭の天使」を明らかにした。「家庭の天使」とは家庭を賛美する風潮であった19世紀において、女性は「家庭の天使」として良き妻、良き母であることを求めた。そして何よりも男性に安らぎを与え、家庭を守る存在でなければならなかった。なぜなら女性は男性よりも劣り、男性に従属するものと考えられていたからである。しかし、男性の海外移住、中流階級男性の晩婚化などを背景に男性の数と女性の数のアンバランスが起り、大量の女性が結婚できなかった。よって、ガヴァネスと呼ばれる家庭教師を主として、女性たちは自活の道を余儀なくされた。外に出て働く彼女たちは、理想の女性像からははずれ、彼女たちは「余った女」と呼ばれた。彼女たちは経済的にも、そして立場的にも曖昧さがあつた為、苦しんだ。不満が募る中で、婦人参政権運動や女子高等教育の拡大の運動など、女性たちが女権運動を繰り広げた。その一方で「新しい女性」という、結婚する機会があるのにも関わらず、結婚しようとせず、母性に欠けるとされる存在が登場した。彼女たちはサイクリングをはじめとするスポーツに参加し、従来の家庭という領域の外に出た活動的な女性として小説やメディアで取り上げられた。

第2章では、19世紀後半になって女性がスポーツに参加していく経緯を考察した。先行研究からは、スポーツが参政権拡大のように大きな運動にはならなかったこともあり、男性とスポーツと比べて女性とスポーツが注目されることが少なかったことがわかった。しかしながら、スポーツをみることによって、社会の根底に存在し続ける性差、そして当時の社会の価値観を学ぶことが為、研究する対象として重要であることがわかった。19世紀後半以前の女性は弱く、受身であることが理想とされていた為、体力の必要とするスポーツとは対極にある存在であった。女性が世間的に許させていたスポーツは、男性の装飾品としての機能を果たせるように華やかな服装でやるもの、そして体力やエネルギーを得る為ではなく、「女性らしい」イメージを作り上げるためのものであった。女権運動が活発化し、男性優位の社会が揺らぎ始める危険性が高まるにつれ、スポーツする女性たちに非難の目が向けられた。当時の女性観である女性は身体的に弱いという考えから、科学者や医者らは男性の特権である政治、教育、経済、スポーツの領域に関わる権利を剥奪されるべきと考えた。彼らは当時の伝統的な女性の役割を妨害すると考えたスポーツに対して攻撃の矛先を向け、女性がスポーツに関わらないように医学的・科学的証拠とするものを生み出した。女性のスポーツ参加の契機を促したのは、健康への関心の増大、女子高等教育の普及、スポーツの楽しさの発見の三つを挙げた。女子高等教育の中でスポーツが取り入れられ、対外試合やリーグが結成されること女性がスポーツする機会が増えた。学校という壁に囲まれた空間であったからこそ、世間からの非難をあまり受けることなくスポーツに打ち込

めたといえる。またスポーツを経験した女性の卒業生たちが先生となり、女子パブリックスクールにスポーツを導入したことで、女性のスポーツとの関わりが増えた。ここで、女性とスポーツ新たな側面が明らかとなった。先行研究では、スポーツと女性は常に女性解放や女権運動の枠組みの中で語られることが多かったが、大半の女性は主義、主張の為にスポーツに参加したのではなく、スポーツ自体の楽しさを発見したという側面である。よって、女性とスポーツの関わりは、必ずしも政治的な意味合いを含まず、娯楽の一面を忘れてはいけないことがわかった。

第3章ではスポーツの中でもサイクリングに焦点を当て、当時の女性にどのような役割を果たしたのかを探った。まず、サイクリングが流行した背景を考察した。サイクリングが普及したのには、当時スポーツが女性に拡大していたこと、更には技術革新によって自転車の機能が向上し、女性にも自転車が乗り易くなったことが挙げられる。次に自転車が女性に与えた影響をみていった。一つは、これまで付き人（シャペロン）を伴って出かけていた女性が、自転車の普及によって、1人で行動する自由を手に入れた。行動の自由は、自分で選択を決めるという精神的な自由にもつながった。さらに、これまで長いスカートをはいていた女性が自転車にまたがるようになったことから、自転車に乗り易いファッションが考え出され、これまで女性を締め付けて女性に負担をかけていた洋服からの解放につながった。また、女性の間での自転車の普及がこれまで男性領域であったクラブへの参加を可能にした。この女性専用のクラブからは、女性が自転車に乗ることを促す月刊誌などが発行され、新しい女性の権利を主張する発信源となる役割を果たした。自転車に乗ること、そして自転車から派生したファッションを身にまとうことで、男性の領域に女性が参加したり、男性と同じ権利を主張する役割を果たしたりしたといえる。第3節ではサイクリングする女性が増える中で、世間がどのような反応をしたのかを論じた。他のスポーツと同様、サイクリングが「女性らしさ」を奪うという道徳的理由から、そして女性の使命とされていた子供を産むことに悪影響を及ぼすという「医学的な」見地から、反論が繰り返された。その一方で、サイクリングする女性に対する世論の変化が見られた。それは上流階級にサイクリングが普及し、世の中のお手本となる人々がサイクリングをしたことで、次第にサイクリングがいけないものという考え方に変化が起こったのである。そして、娯楽という観点からも健康という観点からサイクリングが良いとする考え方も出てきた。

第4章では、スポーツする女性が周囲にどのように見られ、どのような影響を与えたのかをみていった。19世紀後半にはスポーツする女性の数、そして種類とも増えたが、そのことがスポーツする女性の完全なる世間からの受容を意味したのではないことがわかった。その後もスポーツの男性的なイメージが残り、女性らしさを奪うと見なされたスポーツもあれば、男性の優位性を脅かすことを最小限にする為に、そのようなスポーツに積極的に参加しなかった女性たちも少なくなかった。つまり19世紀後半の女性たちは完全に男性と同じような種類のスポーツに参加し、スポーツにおいて男性と同じ立場、権利を獲得した

とはいえない。しかしながら、世間からの見方が全て冷たかったわけではない。スポーツする女性たちが増えることで、これまで科学者や医師が身体的に女性にはスポーツが不適切だとする主張が必ずしも正しくないことが、次第にはあるが、明らかになっていったのである。根深いヴィクトリア朝の道德観が浸透する中で、スポーツに参加する女性が完全に受け入れられることは19世紀後半までには達成できなかったものの、これまで男性によって唱えられた女性像に合致するような女性の身体的な弱さなどの言説が崩れるきっかけをつくったことは大きな意義があったといえる。

本論は19世紀という100年以上前に遡り研究を進めたが、今日でも共通するスポーツと女性の関わり合いの問題を明らかにしているともいえるのではないか。ラグビーやアメフトなど、未だに女性の参加が一般的とされていないスポーツ種目がたくさんある。これは100年経った現代でも、19世紀に言われた特定のスポーツ種目が「女性らしくない」「女性の体力には合わない」などといった考え方が少なからずあるからではないか。

最後に、本研究を進めるにあたり、2年間熱心なご指導を頂いた太田昭子教授に深い感謝の意を表したい。また、ともに研究を進めた太田研究会の皆様に感謝する。

参考文献

- 新井潤美 『階級にとりつかれた人びと 英国ミドル・クラスの生活と意見』中央公論新社
2001年
- 秋元麻美 「辺縁としてのガヴァネス—リスpekタビリティからの脱却」 河村貞枝、今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店 2006年
- 今井けい『フェミニズムと女性労働運動の結合 イギリス女性の運動史』日本経済評論社
1992年
- 川本静子『ガヴァネス(女家庭教師)—ヴィクトリア時代の「余った女」たち』中央公論社
1994年
- 川本静子『<新しい女たち>の世紀末』みすず書房 1999年
- 北条文緒、クレア・ヒューズ、川本静子編 『ヒロインの時代 別巻 遥かなる道のり イギリスの女たち 1830-1910』国書刊行会 1989年
- ギッシング・ジョージ(著)、倉持三郎・倉持晴美(翻訳)『余った女たち』ニューカレントインターナショナル 1988年
- 栗栖美知子、出淵敬子(監訳)『イギリス女性運動史 1792-1928』みすず書房 2008年
- 桑原一良『ベースボールの人類学~背番号 1/8 の大リーガー』文芸社 2007年
- 小森陽一『世紀末の予言者・夏目漱石』講談社 1990年
- 佐々木烈 『日本自転車史 第二巻』三樹書房 2005年
- 武田美保子『“新しい女”の系譜: ジェンダーの言説と表象』彩流社 2003年
- 中島俊郎『オックスフォード古書修行: 書物が語るイギリス文化史』NTT出版 2011年
- 萩野美穂『ジェンダー化される身体』勁草書房 2002年
- 日置久子『女性の服装文化史—新しい美と機能性を求めて』西村書店 2006年
- 前田寛、岡内優明、石橋健司『自転車と健康』東京電気大学出版局 1993年
- 松村昌家、長島伸一、川本静子、村岡健次(編)『女王陛下の時代(英国文化の世紀3)』研究社 1996年
- 渡会好一『ヴィクトリア朝の性と結婚性をめぐる 26の神話』中公新書 1997年
- Baker, W.J., “The State of British Sport History”, *Journal of Sport History*, X, 1983.
- Bijker, W., *Of bicycles, bakelites, and bulbs: Toward a theory of sociotechnical change*, Cambridge, Mass: MIT Press, 1997.
- Costa, D.Margaret & Sharon, Ruth.Guthrie., *Women and Sport: Interdisciplinary Perspectives*, Champaign: Human Kinetics, 1994.
- Cunnington, C.Willett., *English Women's Clothing in the Nineteenth Century : A Comprehensive Guide with 1,117 Illustrations*, New York :The Dover Edition ,1990.

Cunning, Phillis. and Mansfield, Alan., *English costume for sports and outdoor recreation: from the sixteenth to the nineteenth centuries*, Adam & Charles, London:Black, 1965.

Egan, Pierce., *The Finish to the Adventures of Tom, Jerry and Logic*, London: London : Reeves & Turner, 1869.

Fenton, W.H., 'A Medican View of Cycling for Women', *Nineteenth Century*, vol.39,1896.

Gissing, George., *The Odd Women* , London: Penguin Classics, 1994.

Hills, Larry., *The Great Inventions The Bicycle*, Minnesota: Capstone Press, 2005.

Laver, James., *Taste and fashion: from the French revolution to the present day*, London: Harrap,1937.

Lowerson, John., *Sport and the English Middle Classes 1870-1914*, New York: Manchester University Press, 1993.

Mangan, J.A. and Parks, Roberta J.(eds.), *From 'Fair Sex' to Feminism: Sport and the Socialization of Women in the Industrial and Post-Industrial Eras*, London: Routledge,1987.

McCrone, E.Kathleen., *Sport and the physical emancipation of English women, 1870-1914*, London: Routledge,1988.

Ritchie, Andrew., *King of the Road*. London: Wildwood House Ltd., 1975.

Rubinstein, David,, "Cycling in the 1890's Victorian Studies", Vol.21. No.1. Autumn 1977.

Wosk, Julie., *Women and the Machine: Representations from the Spinning Wheel to the Electronic Age*, Johns Hopkins University Press,2003.

2012年12月22日閲覧

<http://www.u.arizona.edu/~memcinto/archery/1855.htm>

2012年12月22日閲覧

<http://library.sc.edu/spcoll/hist/tennis/lawn.html>

2012年12月22日閲覧

Royal Albert Memorial Museum & Art Gallery ホームページ

<http://www.rammuseum.org.uk/collections/fine-art/a-gallery-in-the-gardens/the-fair-tox-ophilites>

2012年8月10日閲覧

<http://www.gracesguide.co.uk/images/5/51/Im1932Bart-Page22.jpg>

2012年12月11日閲覧

Girton College ホームページ

<http://www.girton.cam.ac.uk/>

2013年1月12日閲覧

Jesus College ホームページ

<http://www.jesus.cam.ac.uk/>

2013年1月12日閲覧